

「普通」とは何か

岐阜市立島中学校 3年
馬場 聖七

「普通はこうするよね」「普通に考えればわかることだ」。

私たちは日常のあちこちで、この「普通」という言葉を耳にします。教室での会話、テレビのニュース、あるいは親や先生からのアドバイス。あまりにも多くに使われるため、私たちはその言葉の重みに無自覚になりがちです。

しかし、中学生という多感な時期を過ごし、進路という大きな選択を目の前にした今、私はこの「普通」という言葉が持つ暴力性と、それが作り出す「透明な壁」に強い疑問を抱いています。

そもそも「普通」とは一体何でしょうか。辞書を引けば「どこにでもあるような、珍しくないこと」と出てきます。

しかし、私たちが日常で使う「普通」は、単なる頻度を表す言葉ではありません。そこには「こうあるべきだ」というルールや、多数派こそが正しい、という考えが含まれています。誰かが決めた「正解」という枠組みから外れないようにしているのではないのでしょうか。

以前、私はある友人と将来の夢について話したことがありました。友人が言ってくれた少し珍しい進路に対して、私はつい「もっと安定した普通の仕事がいんじゃない?」と言ってしまったのです。その瞬間の、友人の寂しそうな顔が今も忘れられません。私は良かれと思って、親切心のつもりで言葉を発しました。しかし、その時、私がしていたことは、友人の可能性を応援することではなく、自分の狭い価値観という型に、相手を無理やり押し込めようとする行為でした。私の放った「普通」という言葉は、友人の可能性を否定してしまったのです。

なぜ、私たちはこれほどまでに「普通」にこだわってしまうのでしょうか。それは、おそらく「普通」の中にいれば安心だからです。多数派と同じ行動をし、同じ考えを持っていれば、誰からも批判されず、目立つこともありません。しかし、その安心感と引き換えに、私たちは自分自身の本当の気持ちや、相手のユニークな個性を切り捨ててはいないのでしょうか。

現代社会では「多様性」という言葉が盛んに使われています。それは、「価値観などのあらゆる違いを認め合おう」という動きです。しかし、言葉だけが先行し、私たちの心の中には依然として「普通という名の壁」がそびえ立っています。例えば、SNSで少し変わった行動をする人がいれば、すぐに「普通じゃない」「空気が読めない」と叩かれる現状があります。こうした「普通」から外れる物事を許さない空気こそが、今の社会に生きづらさを生んでいる原因ではないのでしょうか。百人いれば百通りの生き方があり、それぞれの正解があるはずです。

私は、1人1人が「普通」という枠に縛られず、自分自身で物事を考え、お互いの違いを尊重し合える社会を築きたいと考えます。それは決して、わがままに生きるということではありません。自分とは異なる考えを持つ相手を「少数派」と切り捨てるのではなく、「そういう考え方もあるのか」と一度受け止める、心の余裕を持つということです。

私はこれから、「普通」という言葉を使って他人を評価することをやめます。自分の基準を押し付けるのではなく、相手がなぜそう考えたのか、その背景に耳を傾ける努力をします。また、自分自身に対しても、「普通はこうすべき」という観念を捨て、自分の心が本当に求める道を選び取る勇気を持ちたいです。「普通はどうなのか」ではなく、「あなたははどうしたいのか」。この問いかけを大切にしながら、誰もが自分らしく生きていける未来を、作りたいです。